古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 189 号(2018 年 8 月)

シルクロードの文字
―ギリシアとインドの出会い(1)―

吉池孝一

1. はじめに

シルクロード（絹の道）は、狭義には、タリム盆地周辺を経由して、ユーラシアの東と西を結ぶ交易路を指すが、ここでは東と西の文化が行き交った道というていどに緩やかにとらえ、時代もこだわらないことにする。シルクロードという舞台で、異なる民族が交流した結果何が起こったか、そのことを文字をとおして見てみようということである。なお図 1 から、ギリシア、ローマが抜け落ちているとの指摘があるかもしれないが、アレクサンドロスの東征軍が興したグレコ・バクトリア（紀元前 3-前 2 世紀。現在のウズベキスタン東南部からアフガニスタン最北部一帯）のギリシア文字ギリシア語をもって補うことができるであろう。

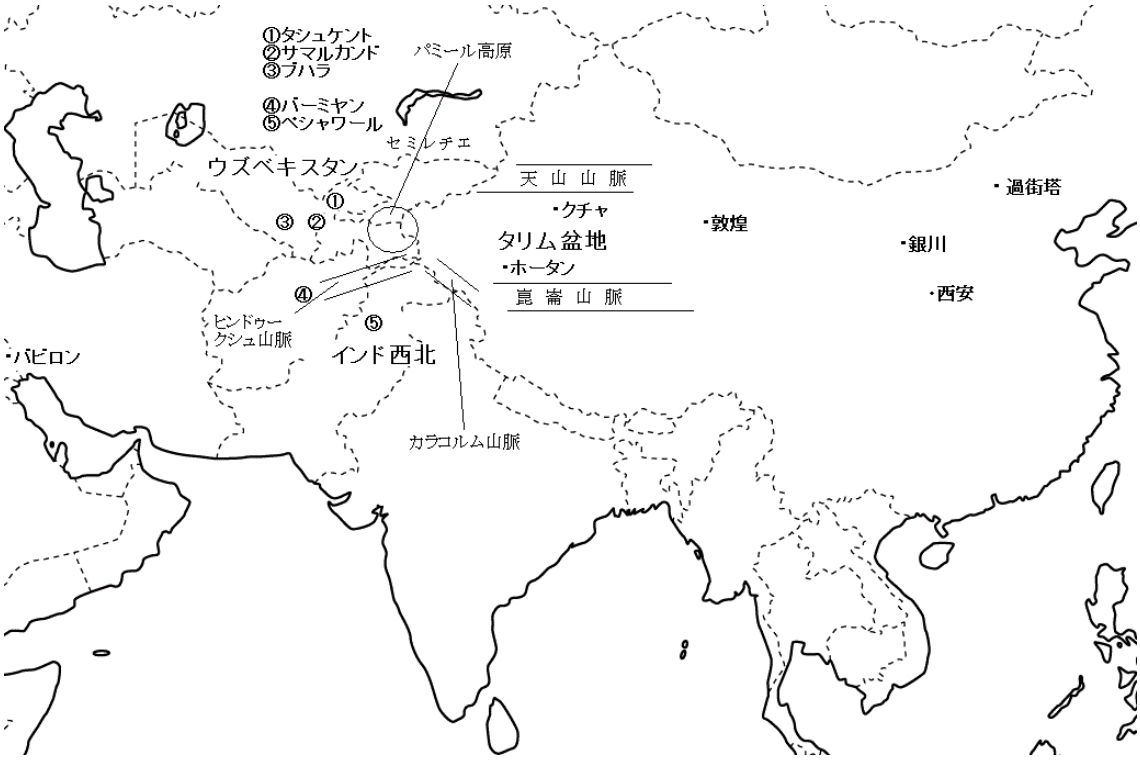


図１．シルクロードに関わる簡略図

2. シルクロードの文字

シルクロードを冠し“シルクロードの文字”として、何を見ようとするのか、

「はじめに」において触れたが、いま少し踏み込んで考えておきたい。シルクロードに沿って“存在する文字”を一つ一つ取り上げるということではない。また、シルクロードに沿って文字資料が運ばれ遠く離れた地点で発見される場合がある。それは互いの交流を示すものとして貴重ではあるが、そのようなものを取り上げるわけでもない。文字組織や表現形式が、シルクロードに沿って伝播し、異なる文字組織や表現形式と接触する。その接触の結果、互の文字組織や表現形式に何が起こったかということを問題にするのである。なお、ここで言う文字組織と表現形式とは次のことを指す。文字は、①要素を組み合わせて文字を作る方法、②縦書き・横書き・分かち書きなどの配列法、③文字の表意と表音の機能を用いて言語を表記する工夫などの点において緩やかなまとまりを成している。それを文字組織と呼ぶ。また、文字を用いて口頭語を書く際にどのような表現が適当であるか検討が加えられ規範化され文章語として一定の型を獲得する。それを表現形式と呼ぶ。

シルクロード上で異なる文字組織と表現形式が出会った結果、何が生まれたかという問題を検討するわけである。その対象となる文字を称して“シルクロードの文字”とする、というのが本稿の立場である。

3. 文字資料の地域と時代

シルクロードに沿って伝わった文字組織や表現形式は多種多様であるが、次の三つの地域と時代にしぼりこみ、その範囲内の文字を扱うことにする。

ア．ギリシアとインドの出会い。
イ．ソグドと中国の出会い。
ウ．モンゴル帝国における諸民族の交流。

アとイは、東西に位置する二つの文化の出会いであり、東西の文化交流の典型の一つとして周知のものでもある。先に述べた“シルクロードの文字”として理解し易いが、ウはやや質を異にする。ウは広大な地域を、一つのまとまりとして捉えることができるようになったときに、そのまとまりの中の諸民族が使用する文字組織や表現形式に何が起こるかという問題である。以上の三つにしぼり込んだわけであるが、なぜこの三つの地域と時代にしぼったかということを述べておかなければならない。ぜひともこの三つでなければならないという学問的な理由はない。この調査では、古代文字資料館[1]が所蔵する資料を利用するのであるが、この方面であるならば資料をそろえることができるということにすぎない。上記のア、イ、ウは地域と時代のしぼりこみであるが、いま一つ、資料の質についてもしぼりこみをおこなう。文字を扱う際、資料の質を一定に

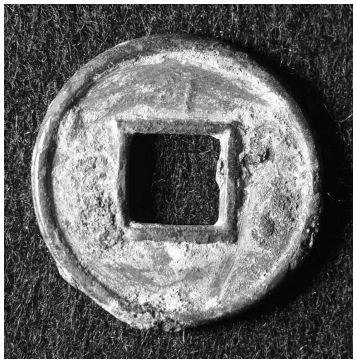
[1] 古代文字資料館蔵 http://kodaimoji.her.jp/

することにより見えてくるものがあるという立場から、貨幣の銘文を資料の中心にすえたい。貨幣の文字は次に述べるように文字のサンプルとして優れている。

4. 貨幣の文字

4.1. 貨幣には硬貨と紙幣があるが、ここでは硬貨のみを扱う。初期の貨幣には文字のないものもあるが、ふつう何かしらの文字があり銘文の体裁をとっている。一字だけのものもあれば、単語・短文もあれば、比較的長い文もある。いま紀元前 2 世紀の貨幣銘文を取り上げてみよう。これは前漢の武帝が発行した五銖銭の系統の銅貨である。片面に漢字漢語で“五銖”と貨幣単位が鋳込まれている。裏に文字はない。

表



裏

次はインド西北のインド・グリーク朝のメナンドロス(ミリンダ)王が発行した銀貨である。

表

裏

表にギリシア文字ギリシア語で“救済者（庇護者）たる王メナンドロスの”とあり、裏にはカローシュティー文字ガンダーラ語で“救済者（庇護者）たる大王メナンドロスの”とある。ひとくちに銘文と言っても、このように様子を異にするわけであるが、貨幣の文字と銘文を取り扱うことのおもしろさについて確認しておきたい。

4.2. 中国貨幣史の名著とされる彭信威(1965)は、他の古物に見られない貨幣の特徴として次の 3 点をあげる。1. 硬くて破損しにくい。2. 数量が多い。3. 広範囲に散布されている。彭信威(1965)はこの 3 点により、もしも或る貨幣が古代に使用されたならば必ず発見されるはずであり、逆に長年の間発見されないならば、そのような貨幣は発行されなかったとすることができるという[2]。なるほど、貨幣にあっては発見されていないものは存在しなかった蓋然性が高い、というのはおもしろい見方である。

比較的新しいものにアンドリュー・バーネット(1998)がある。これによると、他の考古学資料にくらべ、コインには次の特徴があるという。1. 数量が多く耐久性があり、残りやすい。2. 注意深く扱われ保存状態がよい。3. 国家による公式な資料として、デザインや銘は政治や宗教の情報を提供する。4. 文献資料に現れない経済情報を提供する。5. 簡単に且つ正確に年代決定ができる。以上の 5 点をあげる[3]。そのうち第 3 にあげた貨幣の図像や銘文が“国家による公式な資料”として情報を提供するということについては、時と所の違いによってさまざまな状況があり得ることを知っておく必要がある[4]。

4.3. 以上を参考にして、文字のサンプルとして貨幣の銘文と文字を取り扱うことの便宜とおもしろさをあげると次の 4 点となろう。

1. 銘文は短く完結している。
2. 同種のものが複数ある。
3. 規範的な字形字体や表現形式となっている。
4. 比較的容易に年代と地域を特定することができる。

貨幣の銘文は貨幣という小さな面のなかで完結しているのがふつうである。したがって、短いけれども完結した意味が意図されているはずだと、後の時代の読み手は確信することができる。たとえ判読に着手した時点で判読が困難であったとしても、これは読み手に安心感をあたえる(1 の効用)。

貨幣自体に欠落があったり摩滅していたりして、銘文の一部が見えない場合もあるが、そのような場合、同種の貨幣が多数発行されているので互いに参照

---

[2] “而錢幣之爲物，和其他古物不同：第一它必定是堅固不易毀滅的，這是金屬貨幣的一個優點；第二它必定是數量很多的，因爲人人要用它；第三它必定是散佈很廣的，因爲各地都要用它。所以只要古代使用過錢幣，一定會被發現。反過來説，如果這許多年來沒有發現巴比侖和埃及古代的錢幣，我們是否可以認爲，它們在公元前第八世紀以前還不曾鑄造錢幣。”(序 1 頁)

[3] アンドリュー・バーネット(1998:7-8)参照。

[4] 彭信威(1965)は、中国の早期貨幣にあっては政治的な単位による鋳造以外に単位内部の地方都市における鋳造と流通のあったことを指摘する。61-62 頁参照。

することにより銘文を復元することができる(2 の効用)。

次に、規範的であるという点であるが、貨幣は特別な事情がないかぎり、同一規格のものを大量に生産し流通させることを目指すわけであるから、その銘文を記すために選ばれる文字と、その文字を用いた表現形式の適否について、発行者は念入りに検討するにちがいない。その結果、規範的な字形や表現形式を採用することになるわけであるが、従来の規範から外れるようにみえる場合でも、それは偶然の所産ではなく発行者の何らかの意図がこめられていると想定することができる。したがって、文字や表現形式によって発行者達の意図(あるいは規範意識)を考察することができる（3 の効用)。

発行年代と地域という点であるが、貨幣の銘文に年号や権力者の名前が記されている場合、容易に貨幣が発行された時代を定めることができる。もっとも、影響力の大きな人物によって発行された場合、その人物の死後も同一の貨幣が発行され続けるということはよくあることで注意を要するが、それでも貨幣の大きさや重さ図像など貨幣がもつ種々の情報により、ある程度時代を定めることができる。同様に貨幣の製造地も記号（ミントマーク）により特定できる場合がある。いずれにしても、同時代の様々な記述をも参考にして発行年代と発行地域は決定されることになる[5](4 について)。

このようにして発行年代と地域が特定された貨幣はさまざまに利用される。古物に銘があるばあい、年代がわかる貨幣の文字との比較をとおして古物の年代を想定することができるし、年代がわかる貨幣と共に発掘された出土物は貨幣により年代を想定することもできる。この効用は、文字や銘文自体の研究にも及ぶ。これによって、規範的な字形や正書法および表現形式の変遷について年代を追って調査することができる[6]。貨幣銘文の表現形式の変遷が同時代の政治や経済や宗教などの変化と連動していると想定することができるばあいもあり[7]、貨幣銘文の変化を傍証の一つとして利用することができる。また、貨幣銘文が未解読文字の解読の契機となる場合もある[8]。

---

[5] 貨幣製造の時代と場所の決定法については、アンドリュー・バーネット(1998)の第 2 章「年代決定と特徴」が参考となる。当該書は古代ローマの貨幣を主資料とする。

[6] 彭信威(1965)は、中国貨幣の上に漢字書体の大きな変遷が示されていると指摘する。“因此在中國的錢幣上，也反映了中國文字書法演變的痕迹。先秦貨幣上的文字，可以説是古篆。它和甲骨文不同，因爲兩者書寫的工具不同；它不同於鐘鼎文，因爲鐘鼎文是當時文化水平很高的統治階級所寫的，而錢幣上的文字乃各地同鑄錢有關的人所寫的，可以説是民間的文字。秦半兩以後，錢幣上是用小篆。但六朝時已有隷楷的出現，唐代則完全用隷書，或所謂八分書。北宋錢上有行、草，太平天国錢上有簡體字。”（序 5 頁）

[7] 吉池(2002)(2007)は西夏国で発行された西夏文字銭の銘文の変遷と政治状況との関連について述べたものである。

[8] 地中海東隅のキプロス島の貨幣に未知の文字があった。この貨幣を契機としてキプロス音節文字の解読に繋がったことは有名である。この点についてはポープ(1982)の 169-185 頁

5. 貨幣の道、文字の道

シルクロードの文字の検討にあたって、三つの地域と時代にしぼりこんだわけであるが、そのうちの二つ、すなわちギリシアとインドの出会い、およびソグドと中国の出会いに関わる模式化図を見ておきたい。東西文化の交流の道は、“貨幣の道”であり、また“文字の道”でもある。その交流の概略を示すと次のようになる。

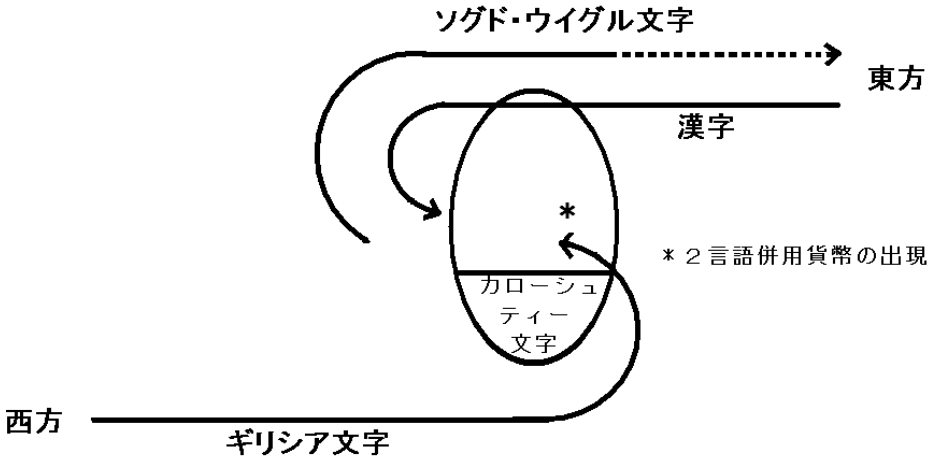


図 2. 貨幣の道、文字の道の模式図

中央の楕円は、パミール高原周辺のソグディアナやインド西北などの地域を指す。西方のギリシア文字の貨幣とともにギリシア人が東漸し、カローシュティー文字やブラーフミー文字を使用するインドの人々と出会い、新たな習慣の型が生まれた。これが一つ目のギリシアとインドの出会いである。次に、パミール高原の左に位置するソグディアナ(今のウズベキスタン)のソグド人が東方の漢字圏の人々と出会い、新たな習慣の型が生まれた。これが二つ目のソグドと中国の出会いである。まず一つ目のギリシアとインドとの出会いについて確認する。

6. ギリシアとインドの出会い

6.1. ギリシアの東漸というと、紀元前 4 世紀のアレクサンドロスの東征をあげることになる。ギリシアからインド西北に至る帝国を築き上げ、貨幣も帝国内

参照。シルクロードの文字としては、インド西北のカローシュティー文字、中国西北の西夏文字をあげることができよう。前者についてはジョナサン・ウイリアムズ(1998)の 167-168 頁で簡単に触れるところがある。後者については吉池 2007 参照。またインド西北を中心栄えたクシャン朝のギリシア文字バクトリア語（イラン系）資料の解読にあっても貨幣は大きな役割をはたした。

の各地で発行された。

表

裏

【a】l　e ks a　n　d r o　u　→aleksandrou アレクサンドロスの

これは古代文字資料館所蔵のアレクサンドロス（紀元前 336-前 323 年)の銀貨。表（左側）はライオンの頭皮を被ったヘラクレス像、裏（右側）は王座に座り、広げた右手に鷲、左手に笏を支え持ったゼウス像とされる[9]。ゼウスの坐像はアケメネス朝ペルシアで発行された貨幣にある神の坐像の影響すなわち東方起源との説がある。これに対して、イタリ南東のアプリア出土のツボに類似の坐像があることよりギリシア世界に元よりあった図像とする説もあり[10]、直ちに東方の影響を論ずるわけにはいかないが、貨幣に坐像を採用すること自体はアケメネス朝の影響であるかもしれない。

銘文については、東方の影響をみてとることができそうだ。貨幣裏の右にギリシア文字ギリシア語の銘文がある。貨幣の内側から外に向き、左から右に読む。最初の文字は欠けているが[A]ΛΕΞΑΝΔΡΟΥ(aleksandrou アレクサンドロスの)とある。王名の属格となっている。父親のフィリッポスⅡ世の貨幣銘文も同様であるから、貨幣銘文に王名の属格を用いる仕方は、父親の銘文を受け継

---

9 “Les monnaies d’argent ont pour types communs, au droit la tête d’Hercule coiffée de la peau de lion, au revers Jupiter trônant, l’aigle sur la main droite étendue, la gauche appuyée sur le scepter.” Müller (1855:2).

10 “An Apulian amphora in the Louvre displays a figure of Zeus with his hand outstretched to receive a flying Nike. This and the throne were of sufficiently marked similarity to the figure of Zeus on the Alexander coinage for Richter to place the two illustrations together, even though the coin chosen came from the mint of Ecbatana in the far east of the empire.” Price (1991v.1:28). 引用文の“Richter”はRichter, G.M.A.(1966)*The Furniture of the Greek, Etruscans, and Romans*,London.

ついだものであろう。もっとも、この属格が何を意味するか問題である。アレクサンドロスの【加護、権威、領有】であるか、それともアレクサンドロスの【貨幣】であるか、或いはそれ以外であるか不明にして知らない。アレクサンドロスの名を冠して発行された貨幣にはこれとは異なる銘文を持つものがある。右に ΑΛΕΞΑΝΔΡΟΥ(aleksandrou アレクサンドロスの)とあり、王座の下方にＢＡΣＩΛＥΩΣ（basileōs 王の）とあり、“王アレクサンドロスの”とするものである[11]。後者の貨幣につては、死後に発行されたとする説[12]と生存中（紀元前 325-前 323 年)に発行されたとする説[13]があるが、ＢＡΣＩΛＥΩΣ(basileōs 王の）を冠した銘文が相対的に後代のものであることは間違いないであろう。このＢＡΣＩΛＥΩΣという称号は、東方の絶対君主を連想させるようで当時のギリシア人に嫌われたとされるが[14]、アジアを版図に収めたギリシア人の支配者が必要としたものであるならば、この称号の採用は東方世界の影響であると言えないこともない。この称号を冠した「ＢＡΣＩΛＥΩΣ（王の）＋王名の属格」は、その後東方世界に広がっていき、各種の貨幣銘文に採用されることになる。なお、ここにあげた貨幣は、王座の下のマークにより発行地がバビロニア（図１の左端）であることわかる[15]。

次回は、アレクサンドロスの東征軍がバクトリアの地に興したギリシア人の王国グレコ・バクトリアの貨幣をみることにする。

【参考文献（発行年順)】

Müller, L. (1855) *Numismatique d’Alexandre le Grand, suivie d’un appendice contenant les monnaies de Philippe ⅡetⅢ*,.Copenhagen. S. Gardiakos(1981)*The Coinages of Alexander the Great Ⅰ*, Chicago:Obol International 所収による。

Newell, E. T. (1911-1912)*Reattribution of certain tetradrachms of Alexander the Great*, American Journal of Numismatics45,New York. Gardiakos,S.(1981)*The Coinages of Alexander the Great*Ⅱ, Chicago:Obol International 所収による。

Burrow,T.(1937)*The Language of the Kharosthī Documents from Chinese Turkestan*. Cambridge: Cambridge University Press.

渡邊　弘(1973)『西域の古代貨幣』学習研究社。

---

[11] 属格形については田中美知太郎、松平千秋(1970)の p.180,p188 参照。-os に終わる男性名詞単数属格は-ou で aleksandrou。eo 語幹の単数属格は-eōs で basileōs。

[12] Newell (1911-1912:28-29)。

[13] Price (1991v.1:32-33)。

[14] “The distaste that the word *Basileus* held for the Greeks is well known, and Alexander’s assumption of the title King of Asia did nothing to allay the fears of the Greeks who saw Alexander making himself a Persian-style dictator over the whole of the known world.” Price (1991v.1:33).

[15] Price (1991:460-468) v.1。本コインは Price (1991) v.2 に掲載されている 3661b に近い。

彭信威（1965)『中國貨幣史』上海人民出版社。初版は 1958 年。第二版は 1965 年。第二版の第 3 次印刷 1988 年による。
田中美知太郎、松平千秋(1970)『ギリシア語入門　改訂版』岩波書店。もと 1951 年。
Mitchiner,M.(1975)*Indo-Greek and Indo-Scythian coinage* ,Volume I, Ⅱ , Ⅲ.London:Hawkins Publications.
菅沼晃(1980)参照。『サンスクリットの基礎と実践』平河出版社。第 3 刷 1984 年による。
モーリス・W・M・ポープ著/唐須教光訳（1982)『古代文字解読の物語』新潮社。
Price,M.J.(1991) *The coinage in the name of Alexander the Great and Philip Arrhidaeus : a British Museum catalogue* v.1,v.2. London : British Museum.
田辺勝美編(1992)『[平山コレクション]シルクロードのコイン』講談社。
前田耕作(1992)『バクトリア王国の興亡』(ﾚｸﾞﾙｽ文庫)第三文明社。
水野弘元(1994)『パーリ語辞典〈二訂版〉』春秋社。
アンドリュー・バーネット著/新井佑造訳（1998)『大英博物館双書⑥古代を解き明かす コインの考古学』學藝書林。
ジョナサン・ウイリアムズ編/湯浅赳男訳（1998)『図説 お金の歴史全書』東洋書林。第 1 刷 1998 年、第 2 刷 2002 年。
Glass,A.(2000)*A Preliminary Study of Kharoṣṭhī Manuscript Paleography*.ｗｅｂ上に公開されている。(http://depts.washington.edu/ebmp/downloads/Glass_2000.pdf)
グプタ, P.L.著/山崎元一他訳(2001)『インド貨幣史　―古代から現代まで』刀水書房。
吉池孝一（2002)「貨幣文字考 ―西夏文字―」,『東洋哲学研究所紀要』第 17 号,(82)-(94)頁。
小谷仲男(2003)「クシャン族とガンダーラ仏教」,『NHK ｽﾍﾟｼｬﾙ文明の道 ②ヘレニズムと仏教』日本放送出版協会,200-225 頁。
Mitchiner,M.(2004)*Ancient trade and early coinage Volume one*. London:Hawkins Publications.
中村雅之（2004)「インドグリーク貨幣の銘文」,『KOTONOHA』第 21 号,1-3 頁。
中村雅之（2004)「カローシュティー文字貨幣３種」,『KOTONOHA』第 22 号,1-3 頁。
吉池孝一（2007)「西夏文字の解読」,『KOTONOHA』第 56 号,11-18 頁。
吉池孝一(2011)「バクトリア王アガトクレスの二言語併用貨幣」,『KOTONOHA』第 99 号,18-21 頁。
吉池孝一(2014)「ギリシアとインドの邂逅 ―貨幣の形態と製造法について―」,『KOTONOHA』第 137 号,9-11 頁。